

# 縁故疎開の思い出より

中村 正雄

大和町四丁目

戦況が不利となって来た昭和十九年の春に学童疎開が始まり、私は、静岡県西部の父の田舎へ縁故疎開をしました。東京では昭和十八年の第一回東京空襲を経験していましたが、ここでは、最初のうちは、空襲警報もたまにしかなく、時々、戦場に出征して行く人を見送ることを除けば、平和な農村地帯という状態でした。

しかし、昭和二〇年になって、毎日、たんぼの中の道を二キロ歩いて通っていた学校も、二時間目の授業が終わる頃になりますと、決まったように、空襲警報のサイレンが鳴りました。そして、東京や京浜工業地帯へ向かう敵の爆撃機B29の大編隊が南から北へと頭上を通過して行くのですが、ここは通路なので、爆弾は落ちて来ませんでした。

毎日定期便のように、同じコースを同じ時間に飛んで来るのに、それを迎撃する日本の戦闘機は減多に見られませんでした。日本にはもう飛行機がないのだろうか？「いや本土に引きつけて攻撃するための戦略なのだ」とか言われて、日本は負け

るはずはないと教えられて来たので、どういふことなのか疑問でした。しかし今と違って、そういうことは口に出して言うことを、はばかられる時代でした。学校の近くには、東海道本線の線路があつて、毎日何十両も貨車をつないで列車が通過していました。何両連結しているかと教えてはいけなと言われたくらいだったので。

晴れた夜の空は、灯火管制と公害のない、きれいな空気のお陰で、満天降るようなきれいな星空でした。今では、人里離れた山頂にでも行かない限り、こういう空は見ることは出来ないでしょう。

東京にいた時は、友達と毎月、有楽町の毎日新聞社のビルに あつた、当時、日本に二台しかなかったプラネタリウムに通つて、野尻抱影さんの解説で宇宙や星の話聞いて、沢山の星座を覚えたので、天気の良い夜は、プラネタリウムの偽物の空ではなく本物の空を眺めるのが楽しみでした。

何千年何万年の過去に星を出発した光が、今地球に届いてい

ます。しかし、この狭い地球の上で、今、人類同士が戦争している最中というのは、何か夢のような気がしました。

戦争の進行とともに食糧事情は悪くなる一方で、配給になる米の量も次第に減らされたので、生まれてから鎌など持ったことのない家族が、みんな手を豆だらけにして、近所の農家から借りた畑で、米以外の、さつま芋、じゃが芋、とうもろこし、大根、白菜などの野菜類を、一通り作るようになりました。

そして、土地の人が食べるフキ、ワラビなどの他に、減多に食べないゼイマイなどの野草類も道ばたや山に行っては、採って来て食べました。

そんなある日のことです。目の悪い祖母が、ヨモギを近くの土手で摘んで来たのは良かったのですが、うどん粉を練って、すいとんを作りみんなで食べたところ、家族全員が中毒になってしまって驚きました。父が残っていたヨモギを良く調べたところ、その中に、若葉の形がよもぎに大変良く似ている毒草のキンポウゲが混じっていたことがわかりました。

父は子供の頃に兔を飼っていたので、青い草なら何でも食べる兔に、これだけは絶対に食べさせてはいけない、と両親から教えられていた草の一つがこの草であったのでした。

雑草も、兔の食べる草ならば食べられると言うことを父は知っていました。

ずいぶん、いろいろな食べ物があつたように思われるかも知

れませんが、現在とは違って、その時に採れた野菜が主食兼副食物となりました。

例えば、大根が採れた時は、食べる物は朝昼晩とも大根ばかり。さつま芋が採れた時は、さつま芋ばかりとなってしまうわけです。

米の不足から、米の代わりとして大豆や、今は家畜の餌に使われている油を搾ったかすである豆かすが配給になったりしました。こんな時には、自作のさつま芋が頼りでした。米に混ぜて主食となり、おかずにもなり間食にもなりました。

終戦になる年の早春の、ある日曜日の昼頃のことです。家の裏側の山の方は茶畑になっていましたが、その山から一条の煙が上がっているのを発見しました。

山火事だと大変なのですぐに走り、山を登って見に行くと、数人の小学生がいて、茶の木の間に敷いてある枯れ木や枯れ草を集めて何か燃やそうとしているところでした。枯れ草に飛び火すれば山火事になってしまいます。当時は、町にも村にも現在のような常設の消防署はなくて、火事の際は、消防団員の人たちが、本業を中断して集まってきて、ポンプを押して消しに行くのです。

土地の子供は間違ってもこんなことはしないので、君達はどこから来て何をしているのかと聞いてみると、隣の町の真如寺に集団疎開で来ている、東京都大田区の久ヶ原小学校の児童で

あることがわかった。日曜日なので昼の食料として、生のさつ  
ま芋を持たされて数人ずつグループになって遠足に来て、自分  
達で焼き芋を作って食べるように言われて来たことなどが分か  
りました。

僕も東京から来たこと、ここで火を燃したら山火事になって  
しまうかも知れないから、絶対にいけないということ話を話して  
家まで連れて来ました。

母に事情を話しますと、江戸っ子で気風の良い世話好きの母  
は、かわいそうだからと、子ども達が持っていた、さつま芋に  
家で作った芋を加えて蒸かしてあげて、充分に食べさせました。  
そして、東京の話をしたり、本を見せたりして遊んで帰りました。

その事件がきっかけとなって、それからは家に、日曜日にな  
ると久ヶ原小学校の子ども達が遊びに来るようになり、その都  
度さつま芋をご馳走したりしました。

そして今度は、集団疎開先の真如寺に母と二人招待されて訪  
問しました。

物資が不足の時代で、写真のフィルムも手に入らなかった時  
代だったので、写真などもなく、当時の先生のお名前や遊びに  
来た子ども達の名前も忘れてしまいました。

世話をした母も、昨年八五歳であの世へ行ってしまった  
が、この世でして来た善行の一つとして、閻魔様も評価してく

れるものと思っています。

あれから五〇年近くたって、戦争を知らない人が多くなった  
現在の日本、お金さえ出せば、食べ物はいつでもいくらでも手  
に入る国民総グルメ。そして、食べ過ぎた結果ダイエットだ減  
量だと騒いでいる人、主食か間食か分からない食事をしている  
人、柔らかい物、甘い物しか食べない子供、飽食の時代に育っ  
た母親に育てられている「我慢する」ということを忘れてしま  
ったような現代の子ども達を見るにつけ、昔いっもお腹をすか  
していても頑張った時代が思い出されるのです。